
ある夏の日の出来事。

彪兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある夏の日の出来事。

【Nコード】

N9350A

【作者名】

彪兎

【あらすじ】

高校生になって初めての夏休み。その朝は平凡には始まる。蒸し暑さと蝉の泣き声に起こされ、目覚める。でも、何かが確実に、変わり始めていた。

01 最初の朝

いつもの朝だった。でも。ほんの一瞬だったのだけど。いつもと何かが違っていた。

夏休み。

高校生初めての夏休みで、部活は中学でやめにした。よく我慢出来たなーと、去年までの俺にちよつと感心。

くだらなく階段を降り、あくび混じりにリビングのドアを開ける。入るとリビングと逆方向へと歩き、キッチンの奥の冷蔵庫からパツクの牛乳を取り出した。それを飲みながら、焼いてあった食パンを持ってリビングのソファへと歩く。

一步一步進めるたびに、裸足がペタペタと音を出す。

「くあ・・・」

またあくびが出る。

ムニャムニャと目を擦り、リモコンでテレビをつける。芸能人が何か料理を作っていた。

なんでも夏バテ解消だとか。

俺はそれには興味を示さず、他の番組へと切り替える。

今大ブーム中の芸人がバンジージャンプをしている。
まだマシかな・・・と、それを食パンを齧りながら見る。

ガチャ

ドアの開く音がした。
ちらつと覗き見る。

「ああ、姉貴」

「『おねえちゃん』って呼べって言うてるでしょ？」

「おはよう」

「無視すんなっつの」

姉貴だった。

「昔はもつと可愛げがあつたのになー」

「俺今何歳だと思ってるの？」

「『和希おねえちゃん』って呼んでどこまでも着いて来てくれたたのになー」

「・・・・・・・・」

無視返しを更に無視で返し、姉貴から視線を外す。
そしてテレビに集中した。

「ねー浩介」

「あ？」

姉貴に呼ばれて振り返る。

そーいやマトモに姉貴の顔を見ていなかった事に気付いた。その時に見た顔は、女としては許せない顔の象徴だった。

眠たさと不満を浮かべ、髪の毛はボッサボサ。

目の下にはクマときた。

・・・口元の跡は、よだれだろうか。

「・・・・・・・・」

俺はそれに思わず溜め息。

「何よー」

「なんでもねー」

俺は

「これが華の１８歳の顔かよ・・・」
というセリフの飲み込んだ。

「あたしの分のトーストは？」

「知らねー」

「あッ！しかもお前・・・牛乳まで！」

「育ち盛りなんだよ」

俺はそう言いながら牛乳を飲み干す。

俺、いまだ今田 こうすけ浩介と今田 いまだ和希はキョウダイだ。
つっても、姉と弟じゃああんま似てない。

「浩介今日は暇なの？」

「んー宿題今日中に終わらせる予定ー」

「は！？まだ7月中じゃん！つかまだ夏休み3日目だし！」

「俺はねー、姉貴とは違って嫌な事は先に済ましちゃう主義なんですー。嫌いなオカズも先に片付けるんだよ」

それと対照的に、姉貴は好きな事を先にするタイプ。

飯でも、好きな物を先に食って、最後に地獄を見る羽目になるのだ。

俺は空になった牛乳パックを持ってキッチンへ行く。

姉貴は冷蔵庫を漁っていた。

「そんなに開けっ放しだと冷気が逃げるぞ」

「しょーがないじゃーん」

俺は着替えようとキッチンを出る。

「ねえ 浩介」

「ん？」

呼ばれて、姉貴を見た。

姉貴は俺を見てはいなかった。

そして、うつむいていた。

「アンタ、彼女いたっけ？」

なんだろう、と思いつつも、質問には答えた。

「いねーけど」

その答えに、姉貴の顔が、パツと上がる。

「……そ。なアんだ。夏休み中にラブラブデートでもするモンだと思ってた」

ハハハと笑いながら、姉貴はそう言った。

そう。

この一瞬。

この一瞬だけだったのに。

何かが、音をたてて

崩れていく気がした。

02 その夜

夜になると、俺は宿題を終えていた。

下からは姉貴のバカ笑いが聞こえてくる。

テレビを見ながら両手を叩いて笑う姉を想像し、げんなりする。
同時に、

「猿みてえ」

とも思った。

俺は終わった宿題を鞆にしまい、リビングへと降りていった。

ドアを開けて入ると、キッチンでは母さんが食器を洗っていて、父さんはパソコンを叩いていた。

まあ普通の家庭像だな、と思いながらソファへ向かう。

そこには、ただ一人普通の家庭像から浮いている奴がいた。

その姉貴の姿は、俺の想像と全く同じだった。

「・・・・・・・・」

俺は小声で

「ビンゴ・・・」

と呟く。

「は？何かゆった？」

「べーつにいいー」

俺はそっぽを向き、テーブルの上のスナック菓子に手を伸ばす。
だがその手はバシッと弾かれた。

「つてえー。なんだよオ」

「あたしのなんだから食うな！」

「姉貴と違って宿題終わらせたから小腹空いてんの。それに育ち盛りだっつただろ」

「後半はまだいいとして前半がムカつくー!!」

そう言って俺のほっぺたを両手で思いきりつねってきた。

「いででででででー！」

「『ちようだい。おねえちゃん』って言ったらあげてやってもいいわよ」

「ほんなん言っはけねえはほ」

訳・そんな言っわけねえだろ

言語に『は行』増やしつも言った言葉に姉貴はにっこりと笑い、

「そつ。ならいいわ」

と言ってもつとつねる。

「いででででででででででー!!ギブギブー!!」

ちよつと泣きかけた所に。

「和希！それくらいにしときなさい」

「ちえ」

天の助けとばかりに俺は猛ダッシュで姉貴から離れた。

・・・俺の目はちょっと潤んでいる。そんな俺を見た父さんは笑う。

「浩介も男の子なんだからお姉ちゃんに泣かされたりするんじゃないの」

「だつてえ」

「そいつはチビだからあたしに反抗出来ないのよ」

俺の言い訳を遮って、姉貴は嫌味を言った。

「てんめー人が気にしてる事をオ！！」

「ふーんだ」

「チビつつたって3cmしか変わんねーじゃん！」

「それでもチビはチビでしょ？」

「くっはー！ムカつくー！！」

姉貴の言葉に俺は地団駄を踏む。

確かに俺はチビだ。

高1で168cmはさすがにキツイ。

中学生に間違えられた事は4月から数えても約20回程。

対する姉は171cm。

女子にしては大きい方だ。

キョウダイなんだから、そのへんくらい似たっていいだろう。

父さんは180cm以上と大きいけど、母さんは158cm。

きっと俺は母さんの遺伝子を多く受け継いでしまったんだ。

神様は不公平だとつくづく思う。

ため息をつきながら姉貴を見る。

姉貴はなぜか、自分の手をじっと見つめていた。

「・・・？」

顔をよく見ると、ほの顔はほんのり紅く染まっていた。

俺はそのワケが分からず、気にしない事にした。

「あ」

そーいえば最近、姉貴は様子がおかしかった。

でもそんな俺には関係ないか、と思い、考えるのはやめた。

どうせ好きな人でも出来て、夏休み中は会えなくて切ないわーなんて思っているだけなんだろうし。

「俺風呂入るわ」

姉貴の事なんかどーでも良かったから、俺は気にせず風呂へ向かった。

その後ろ姿を、姉貴が見つめていた事を知っているのは、きっと姉貴自身だけだろう。

ゆっくりと、何かが崩れる音が大きくなっている事など、誰も知らなかった。

否、知っていても、誰にも止められないのだ。

この崩壊を。

02 その夜（後書き）

一度、同じ文が何度も重なるという事故（？）がありましたので、文がおかしくなっているかもしれません。もしありましたら申し上げます下さい。

03 あと2秒

朝、起きる。

俺はゆっくりと階段を降りる。

だらしなくパジャマに手をつ突っ込んでボリボリとかく。

「ふあゝあ・・・」

ついついあくびをする。

外からは、今日も元気に蝉が鳴いていた。

俺はキッチンへと足を向け、辺りを見回す。
でもあんまり食欲がない事に気が付く。

「・・・コーンフレークぐらいにしとくか」

俺は棚からコーンフレークの入った箱を取り、冷蔵庫から牛乳を取る。

容器に入れたコーンフレークがカラン、と乾いた音を出す。

そこに牛乳を注ぎ、大きめのスプーンを突き刺して、リビングへと歩いていく。

昨日と同じようにテレビを付ける。

色々と番組を変えていき、とりあえず一つで止める。

今日オープンの遊樂地の宣伝をしている。

画面の中では、アナウンサーと若手芸人がリポートをしている。

「あれ面白そうだな・・・」

俺はポツリと独り言を漏らしながら、シャクシャクと音をたてながら食べる。

バンツ！

「ツ！？」

俺は突然響いたその音にビビる。

口に入れていたコーンフレークを噴き出しかけた。

その音が勢い良く開け放たれたドアだと気付くのに、そう時間は掛からなかった。

ゆっくりと振り向く。

テレビの中では笑いが聞こえる。

「・・・・・・姉貴」

そこには、入り口で俺から見て横向きに仁王立ちした姉貴がいた。

その顔はまたクマがあり、髪の毛もボサボサだった。

その顔は不機嫌そのもの。

「・・・んだよ、姉貴」

俺もちょっと不機嫌気味に聞いてみる。

だがその顔は俺の方へとは少しも向けられず、真っ直ぐ前だけを睨んでいる。

俺は目の前に何かあるのかと思って姉貴の睨んでいる方向を見るが、何もない。

俺はワケが分からなくて、姉貴と姉貴の睨んでいる方向を交互に見

る。

でもやっぱり何もない。

「おい、姉貴ってば」

俺が少し苛立った様子で呼ぶと、姉貴がこっちを向いた。

「・・・・・・・・」

でも何も言わない。

ただ睨まれている。

・・・正直、かなり怖い。

しばらくすると、姉貴はこっちに向かってあるいて来た。
裸足が床に引っ付いて、歩く度にペタペタと音が鳴る。

「・・・・・・・・・・・・・・・・浩介」

やっと喋った。同時に、ペタペタという音が鳴り止み、姉貴は俺の
目の前に立っている。

「さぁご覧下さい！お客様がどんどん入って来ます！」

テレビから元気な声が聞こえる。

だがそれとは対照的に、俺と姉貴は黙り込んだままだ。

「な、何・・・？」

長い沈黙に我慢出来なくなった俺は、重い口を開いた。

ぐ
い
っ

—— は？

俺の視界は壁側から天井へ移った。

姉貴の顔もさつきより随分近い位置にある。

俺の顔に姉貴の長い髪の毛がかかり、少しくすぐりたい。

—— 今の俺の状況を短くまとめてみると。

俺は、姉貴に押し倒されていた。

ソファアートの下で。

もう、歯車は止まらない。

04 運命の瞬間

—— 問題。

今俺は姉に何をされているのでしょうか？

答え：押し倒されている。

—— って、おかしいだろ！

脳内での一人問答&一人ノリツッコミを終えた俺は、抵抗に出た。
とりあえず姉貴の肩口を掴み、押し退けようとする——
が。

「ああゝねえゝきいゝ・・・!!」

「何よ」

「~~~~!!・・・ぢぐじよゝ!」

どうやら俺の痩せ細った筋肉のない体では、姉貴を押し退ける事は

無理らしい。

ああなんと悲しきかな。

男としてのプライドはズタズタで、涙が出そうになる。

「何したいワケよ？」

「~~~~！見てわかんねえのかよオ！？」

「全く」

もう俺のプライドはズタズタどころか粉々だ。

「ふぬっ・・・！ふぬぬぬ・・・！！」

無駄な努力を延々と続ける俺を見て、姉貴が一つ溜息をついた。
そして。

姉貴を退かそうと必死で突っ張ろうとしている俺の両腕を、姉貴が
掴んだ。

持つ所を手首に変え、力を込められた。

完全に、ソファーにはりつけ状態にされ、身動きが一切出来なくな
る。

ちょー！ちょちょちょちよつと待てい！！

これは非常にヤバイ展開なんじゃないか！？

もしかしてもしかしてなのか！？

こんなの載せちゃっていいのか作者！？

混乱のあまり俺はワケの分からない事を脳内で口走り始める。

「ああ姉貴ッ！姉貴こそ何がしたいワケよ！？この体勢は何！？普通逆・・・まあここんとは置いて・・・。何なんだよ！？」

俺は自分を冷静にさせる為と、姉貴の行動を止めさせる為に、一気に疑問を吐き出す。

「・・・マジで分かんない？」

俺は頭は吹っ飛びそうな程首を縦に振る。

その姿に姉貴は溜息。

そして、大きな瞳で俺を真っ直ぐ見据えながら、言った。

「アンタが 好 き って事だよ」

硬直した。

さっき言われた事が、上手く脳に伝達されて行かない。

——問題。

俺は今姉に何を言われたでしょう？

答え：愛の告白。

—— って！お・か・し・い・だ・ろー！！

ようやく意味が分かった。
益々混乱を引き出したただだが。

「ちよっ・・・何言ってん・・・」

「本気よ」

強く言われ、一瞬言葉を失った。

「こ、この行為はそーゆー意味なワケ!？」

「うん。襲ってますよ?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「アンタを食べる気満々」

・・・今度こそ俺は言葉を失った。
俺は白目になりそうなのを必死に堪える。

歯車は、軽快な音をたてて回っていく。

その音は、鳴り止む心配がない。

05 衝撃の真実

状況報告。

——相変わらず俺は、姉貴に押し倒されています。

「・・・・・・・・・・なあ」

「なあに？」

「・・・・・・・・・・どいてくんね？」

「無理なお願いね」

姉貴は俺に何をして欲しいんだろうか。

・・・この状態では出来ることも出来ないではないか。
とにかく手首くらいは自由にしたい。

結構力を込めて握られているので、その部分がキリキリと痛んで来た。

「なあ姉貴」

「ん？」

「この状態いつまで？」

「・・・考えてなかったわ」

姉貴も少し困ったように笑った。

いつもと変わらないその笑顔に、この現実のおかしさを思い知らされる。

——姉貴は俺しか見ていない。

さつきから、ずっと。

俺は気まずさに視線を泳がすが、姉貴の視線は変わる気配がない。

なんでこんな事になったんだろうか？

俺姉貴に対して何か特別な事した？

家族の——キョウダイの一線を越えるような事をしただろうか？

「なあ姉貴・・・」

「何？」

「俺達さー、キョウダイなんだよ？家族なんだよ？」

「・・・」

姉貴が、キュツと唇を噛み締めるのが見えた。
眉間にも、軽く皺が寄る。

俺は言葉を続けた。

「血も繋がってるんだぜ？だからこんな事許されるワケ——」

「繋がってないよ」

——
え？

今、なんと？

俺の空耳だろうか。

いや、空耳であって欲しい。

「ゴメン、姉貴。今のよく聞こえなかつ——」

「何度でも言ってやるわよ」

凜とした声。

テレビが付いていて、それなりに音がするはずなのに、
外ではセミがうるさく鳴いてるハズなのに。

俺には何も聞こえなかった。

姉貴の声以外は。

「あたしとアンタには、血の繋がりなんかない。キョウダイなんか
じゃないのよ」

俺はただ、目を見開く事しか出来なかった。

耳を塞ぎたくても、手は姉貴の手首の中。
いや、俺はまだこの人を、『姉貴』と呼んでいいんだろうか。

歯車は大きな音をたてる。

それはまるで、泣き声のようにも思えた。

06 本当のコト

嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ。

そう、これはきつと嘘。

突拍子のない、その場限りの嘘。

何を言ってるんだ？

意味が分からない。

こんな時に冗談はやめて欲しい。

タチが悪過ぎるじゃないか。

俺の口元から乾いた笑いがこぼれた。

でも、目まで笑えてないのが自分でも分かった。
背中がじんわりと湿っている。

「は・・・ははは。なあに言っただよ、姉、貴」

『キョウダイじゃない』？

『血の繋がりなんてない』？

そんな馬鹿な話、あつてたまるか。

そう、俺達はキョウダイ。

今までも、そしてこれからも、ずっとそうであるべき。
たった二人の。

「信じらんない？」

少し笑いを含んだ声で、姉貴は言った。

「でも。悪いけど事実なの」

姉貴の目元と口元が楽しそうに歪む。

何が楽しいんだか、俺にはさっぱりだ。

俺の思考はまだ止まったまま。

同じ言葉が、脳内をぐるぐる廻る。

こめかみの辺りがジンジンする。

目の奥も熱くなって来た・・・気がする。

「もちろんお母さんもお父さんも知ってるわ。知らないのはアンタだけ。ゴメンね?」

いたずらっぽく笑いながら、心からではない謝罪を述べる。

どうせなら。

教えてなんて、くれなくて良かったのに。
なんで。

なんで言っただよ。

行き場の無い怒りのようなものと、ワケの分からない悲しみにも似た気持ち湧き出る。

「アンタは、お母さんの連れ子なの」

聞きたくない聞きたくない聞きたくない聞きたくない聞きたくない。

「つつても、お父さんと再婚した時にはまだお母さんのお腹の中だったんだけどね」

やめろやめろやめろやめろやめろやめろやめろ。

「だからアンタは、お母さんの前の旦那の子供。あたしと、血なん

か繋がってないのよ」

こめかみが痛い。

鉛を飲み込んだみたいに、胸の辺りが重苦しい。

心臓か、肺のある部分がギュウギュウ痛む。

息がしづらい。

「どうしたの？」

姉貴と目が合う。

「ショックだった？」

クスクスと笑いながら、俺のおでこに自分のおでこをコツンと当てる。

「でも・・・全部ね、ホントウ本当なの。あたしは嘘なんて、一つもついてない」

俺の手首を押さえていた手を離し、なだめる様にその両手で頬を包む。

当てられたおでこ、頬を包まれた両手は、温かい。

「あたしが、アンタを好きってのも、ホントウ本当。キョウダイとしてなんかじゃないのよ？人として、本気で好きなの」

静まり返りかけた頭が、また混乱して来た。

「——好きよ、浩介」

姉貴の声が、耳に、頭に、全身に。

重く、響き渡る。

歯車は、廻り続ける。

音を立てながら。

——その音は、ひどく哀しげに聞こえるが、どこか楽しそうにも聞こえる。

07 途切れる

蝉が、一瞬鳴き止んだ。

ピンポーン

チャイムが部屋に響く。

「浩介、和希。忘れ物しちゃったから戻ってきたの。ココ開けてー」

母さんの声。

同時にドンドンとドアを叩く音も聞こえる。

やった！

さすが母さん！！

いい時に来る！

俺が歡喜しているのを知ってか知らずか、姉貴は一つ溜息をし、俺から離れた。

俺はすぐに起き上がり、まだ煩い心音を宥めようとする。

……一体、何だったんだ。

遠くから、ドアを開ける音と、母さんの声が聞こえた。

俺は階段を上がり、自室へ戻る。
姉貴の視線を感じたけど、気付かないフリをした。

バタン

ドアを閉める音が、やけに響いた。

俺は部屋に入ってから、真っ直ぐベッドに向かって歩き、腰掛ける。

「・・・・・・・・」

黙って、右手首に視線を落とす。

少し、赤い跡があつた。

左手首にも、同様のモノがあつた。

・・・この跡は、姉貴の想い？

考えれば考えるほど、思考は行き詰っていく。
考えるのに疲れて、俺はそのまま横に倒れた。
ギシッと、スプリングが鳴る。

軽く目を閉じ、世界に暗闇を落とす。

なんだか気持ち良くて、もう寝てしまおうと思い、ベッドに潜り込んだ。

あー・・・もう・・・疲れた・・・。

すう・・・と、夢の世界へ旅立とうとした瞬間。

カチャ・・・

控えめな音を出して、ドアが開いた。

俺はそれにわざと反応せず、そのままの姿勢でいる。

「・・・・・・・・・浩介」

姉貴の声。

音量は、小さい。

「・・・・・・・・・浩介？」

もう一回呼ばれる。

聞こえないフリ。

「・・・・・・・・・こーうーすーけー」

返事は、しない。

「寝てるの？」

姉貴は、俺が寝てると思い込み、部屋に入って来た。

俺は、しまったと思う。

起きるタイミングを、失ってしまった。

もう今更、起きてましたなんて言えねえ。

どうしようを考える。

今起きてもきつとさつきと同じ様なコトになるに違いない。

だからといってこのまま寝てるフリもキツイ。

もぞり、と少しだけ動いてみる。

でも、姉貴は何も言わない。

そうしているうちに、姉貴がすぐソコにいるのが分かった。
そして。

ギシッ

姉貴が、ベッドに座った。
そう。

俺の、すぐ横。
5 c mくらい先。

もう寝たフリしよう・・・。

俺はまた目を閉じた。

歯車は、更に速度を上げる。

ガラガラガラガラ

がらがらがらがら

と。

08 独白

心臓が、破裂しそうだった。

冷や汗が、背中を伝う。

俺は思わずベッドのシーツを握り締める。

目を開こうと思うのに、上手く体に信号が送られない。

ヤ・・・ヤバイ・・・。

どうすればいいのかわからず、俺は固まったままだった。
必死に考えれば考える程、頭が真っ白になっていく。

ギシッ・・・

姉貴が、ベッドに手をついた。

俺はドキッというよりビクッて感じの反応を示してしまう。
それでも、狸寝入りに姉貴は気付かない。

「ねえ浩介・・・」

な・・・何を言う気なんだ・・・。

「・・・・・・・・ごめんね」

え？

急に、謝罪が降って来た。
思考が中断される。

俺の目が、見開かれる。

どういうことだ・・・？

「こんな予定じゃなかったんだけどなあー・・・。気持ち・・・伝える気なんてなかったのに」

姉貴は、自嘲気味にクスツと笑った。

「アンタとは・・・キョウダイでいたかった・・・本当よ？」

静かに、語り始める。

「ずっと・・・一番近くでいたかったの。血の繋がりが無いからって、それを——キョウダイとしての絆を捨ててまで一線越えた
いだなんて思わなかった」

「……………」

俺は、また強くシーツを握り締める。

……姉貴……。

「今のままで……十分幸せだったのになぁー。なんで……なん
でこんな事しちゃったかなぁー……あたし」

また自嘲気味に笑う。

それに、俺は少しずつ胸が締め付けられる。

「ごめんね……。聞きたくない事まで言っちゃったね、あたし。
嫌な思いさせたよね」

姉貴の声が、少し震えていた。

「あたしの事……嫌いになっちゃったかなぁー……。もう、キ
ョウダイとして接してくれないかなぁ……」

ズツという、鼻を吸る音がした。

姉貴……。泣いてる？

起きた方がいいのかと思ったその時。

「……………ごめんね」

もう一回謝り、

「・・・寝てるヤツに、何話し掛けてるんだか」

と軽く笑って、姉貴は部屋を出た。
出る時さえ、控えめにドアを閉じた。

パタン

ドアの閉まる音が、静かな部屋に響く。

「・・・・・・・・・・」

俺は、もそりと起き上がる。
眠気なんか吹っ飛んだ。

俺は・・・どうしたらいいんだ・・・？

さっきまでの姉貴とは全然違う態度に、俺は何も言えない。
何故か、涙が出そうになる。

「・・・・・・・・ツ・・・」

赤い跡がある手首が、一瞬チリツと痛んだ。

歯車が、突如弱々しく廻る。

カラカラカラカラ・・・

からからからから・・・

泣きたいなら、泣けばいい。

苦しいなら叫べばいい。

誰も——それを咎めはしないのに——。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9350a/>

ある夏の日の出来事。

2010年10月17日14時29分発行